



株木建設株式会社 茨城本店  
土木部次長

塚本 光一 さん  
つかもと・こういち

1993年東海大学海洋学部海洋土木工学科卒業、株木建設入社。防波堤(沖)ケーソン据付工事、南防波護岸津波高潮対策工事など歴任。2019年から現職。茨城県、53歳。

# あの頃、 思い出の現場

関西国際空港2期工事

## 陸上土木での ノウハウを 生かす

地元(茨城県)で多くの実績があり、魅力を感じていた企業だったというのが入社のも動機です。港湾土木も手がける企業ですので、大学で学んでいた海洋土木工学が生かせるとの期待もありました。

1993年の入社直後に担当したのが、常陸那珂港(現茨城港常陸那珂港区)南防波堤築造工事での

ケーソン据付工事です。当時はまだ、沖合の東防波堤が未整備だったので、外洋に直接面する現場でした。陸上工事以上に港湾工事は気象・海象の影響を受けやすく、急変することもたびたびです。外洋に面する分、風や波の動きに左右される中での施工となりました。

外洋からの風は想像以上に強く、辺り一面が一瞬にしてウサギが跳んでいるような状況となり、ケーソンの流失を防止するためのワイヤが切断するほどでした。幼児の握りこぶし大の直径のあるワイヤが切れるくらいの強風です。切れたワイヤにぶつかれば、命を落としかねない大けがを負う恐れがあります。大学を卒業したばかりの若い時だったので、「こんな怖い仕事、嫌だ」と感情的になりましたが、今では続けて良かったと思っています。

毎日朝夕と、NHKのラジオ放送で気象情報を聞いて、天気図を作成して、作業日の天候を予測

します。気象データ・予測が手軽に入手できる現在から見ると、隔世の感があります。当時は港湾工事の担い手として当たり前の業務の一つでした。

天候悪化が予測できる日は施工できません。毎朝5時に沖合へ船に乗って海を見に行き、8時にその日の海象を発注担当者に報告するのが日課でした。入社4~5年目の頃、大洗港でのケーソン据付工事を担当していた時、発注担当者に海象の悪化を伝えるのが1カ月ほど続きました。「今日もうねりがあり周期も長いので施工できません」と、毎朝8時に報告する日々です。役所の窓から見える海は穏やかなので、「なぜですか」と問われます。そこで、「一緒に海を見に行きますか」とお声がけすると、「行きません」という返答の連続でした。

据付後にはケーソン内に中込材を充填して固めなければなりません。それには1週間くらいの期間が必要です。2函据え付ける工事のうちの残る1函です。工期末が迫り、不安な毎日の1ヶ月間でしたが、運が良かったのでしょうか。その後は順調に施工が進みました。海上工事は、自然と真正面に



関西国際空港2期工事

向き合いながら行う作業となります。今日作業できても明日作業できるとは限りません。「今日できる作業は明日に残すな」と上司に言われたことが思い出されます。

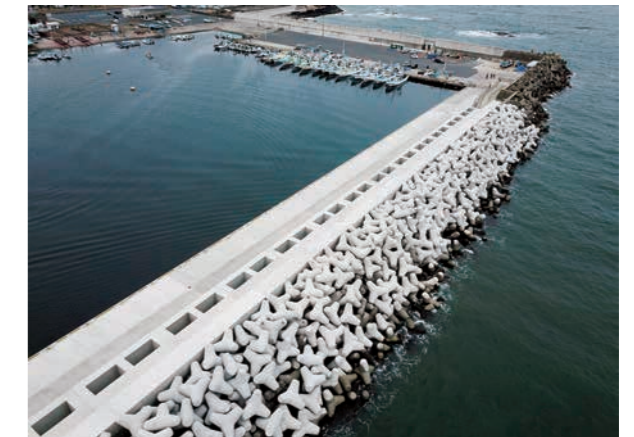
これまでに携わった現場は港湾工事だけに限らず、半分近くは陸上工事です。このうち、管理型処分場としては国内最大規模となる「エコフロンティア かさま」の整備に携わった時、JVスポンサー会社の担当者に現場運営の方法や考え方を、約2年間みっちりたたき込まれたのは今でも忘れられません。ここで得たノウハウが、その後の工事でも大いに役立っています。

工期に制限があり、工期内で終わるか終わらないかの樋管工事では、現場代理人だった自分を含む社員3人が携わりました。業務量が多く、休日の取りにくい工事でした。それでも、月~金曜日に段取りを進め、ローテーションを組んで社員3人が1週間に1日は休暇が取れるように工程を調整しました。現在、社会全体で働き方改革が進んでいますが、建設業界も完全週休2日制の実現に向け、発注者の協力を得ながら業界全体で取り組

んでいるところです。土日は必ず休むという強い気持ちを持って、業務を分担するなど皆が協力しあう雰囲気が大切だと思います。

関西国際空港2期工事では、JVのスポンサーとして消波ブロック製作および据付工事に参画しました。この工事では監理技術者を担いました。大手マリコン各社のJVが施工している他の工区ほどの規模ではありませんが、JVスポンサー会社としての経験を積めたのは大きな収穫です。発注者や他工区業者など関係者との調整業務に取り組んだ日々は、いい思い出です。

港湾工事は気象・海象に左右されます。まさに自然と向き合った工事といえるでしょう。加えて、不安定な船上での作業は、陸上工事以上に神経をとがらせます。波やうねりで船は揺れるので、天候を見極めながらという、自然相手の工事です。この醍醐味は港湾工事ならではの魅力といえます。さまざまな出会いがあり、多くの人とも知り合いになりました。お互いが助け合わないと、港湾工事は務まりません。



大洗港南防波護岸津波高潮対策工事

港湾工事の多くは3月に竣工を迎えます。この、春の風を受けたときの達成感は、表現しようのない充実感に包まれます。難工事で苦勞した分だけ、喜びもひとしおです。この感動こそ、今日まで仕事を続けられた原動力になったと思っています。この喜びを若い人にも味わってもらいたいと思いますし、この魅力を発信して若い人の入職に結びつけるのが私たちの責務です。

建設業界は、魅力向上が喫緊の課題となっています。休日を取り、時間外業務を減らさなければなりません。それには一人一人が作業の効率化を図らなければなりません。時間軸の捉え方を改め、「30分しかない」のではなく「30分もある」と、いかに業務・作業効率を高めるか考えるべきです。現場にいる職員全員が、担当にこだわらずに目の前の業務・作業を分担してこなすというチーム一丸の姿勢が必要です。

私たちの仕事は日々の暮らしや経済活動を支えるインフラを整備するものです。この魅力を発信し続けるとともに、時代を担う若手の育成に力を注いでいきます。